

2025年度附属中学校・学校経営計画

～生徒も教員も誇りをもって、ここに集う喜びの感じられる学校に～
生徒の声、保護者の声、先生方の声を集めて

2025.4.7

I.大学の第4期中期目標・中期計画(附属学校について)2022(R4)～2027(R9)年度

(A)【附属学校園の取組 K19】

1. 各附属学校園において、それぞれの年齢段階に応じた特色ある教育モデルに関する研究・実践を行うとともに、社会貢献及び学校教育水準の高度化等に資するため、その成果を社会に発信する。また、大学と附属学校園が緊密に連携する「オールお茶の水」体制のもとで、連携を推進するための体制や教育研究環境の整備を図りながら研究や取組を協働して進め、学生の実習や教員の研修を行うとともに、先導的な教育モデルや教材等の開発及びそれらの成果の発信を進める。

【K19-1】R7年度

- ◆①附属学校園教材・論文データベースの充実(記載:52件以上 ②利用者数:1,500名以上)
- ◆附属学校が取り組む特色ある教育モデルに関するシンポジウム・セミナー開催数:4件以上

【K19-2】R7年度

- ◆附属学校園で実施する教育実習生受入数:100名以上、インターンシップ受入数:35名以上
- ◆教員FD実施数:3回以上(FD参加者アンケートで、大学と附属の連携に関する意識向上及び授業改善に活かすことができたとする割合:80%以上)

(B)【その他、大学の各機関と連携した取組】

1. サステナブル社会実装機構(SDGs推進研究所)との連携【K3】

- 【K3-2】大学と附属学校園が協同し、SDGsの達成を推進していくことができる高度人材の育成に取り組むとともに、本学の特色としての生活者起点によるSDGsを大学の経営及び運営に活用し、全学で取り組む体制を構築する。また、第2回SDGs認知度調査を実施し、令和4年度から令和6年度までの同調査結果を基に中間評価を実施する。

2. 総合知開発研究機構との連携【K5】

- 【5-1】コンピテンシー育成開発研究所:附属学校園と連携し、コンピテンシー育成を柱とする幼児期から大学卒業までの段階的教育モデルの開発・実践・発信に取り組む。

R7年度:コンピテンシーの一貫教育モデルを構築するため、コンピテンシー・ベースの教育実践や、教材開発、学生等のコンピテンシー測定を継続するとともに、コンピテンシーの一貫教育モデルを提案し、育成手法等に関する取りまとめのシンポジウムを開催する。併せて、学内評価委員会を設置し評価を実施する。さらに、附属学校園と連携し、伝統芸能に関する発達段階を踏まえた教育モデルを提案し、ウェブサイトや報告書等で発信する。

- 【5-2】理系女性育成啓発研究所:初等中等教育における女性の理系進路選択の促進、附属学校園との連携による理系人材育成プログラムの開発。

R7年度:理系女性育成啓発のために全国的女子中高生・保護者・教員を対象としたシンポジウム・セミナーを継続して開催する。令和6年度に引き続き、附属学校園と連携した取組を推進するとともに、理系女性に必要なコンピテンシー育成の観点を基盤とする取組を検証し、改善をはかる。

- 【5-3】サイエンス&エデュケーション研究所:災害時レジリエンス教育を地域の小中高校の児童・生徒と教員に対して実施する。

R7年度:令和6年度に引き続き、連携する自治体・学校と協力して、個別観察実験を重視した対面およびオンライン授業コンテンツを開発し、理数教育支援を行う。具体的には、小・中・高校教員に対する理科教員研修、児童・生徒に対する理科出前授業や授業支援、一般市民に対する公開講座を開講するとともに、SSH 連携校の生徒等に対する課題研究支援を行う。また、災害時におけるレジリエンス教育・研究を推進する。

Ⅱ. 附属中学校の教育目標

〈学校教育目標〉「自主自律の精神を持ち、広い視野に立って行動する生徒を育成する。」
〈教育の3つの柱〉「あたたかく深い人間力」の育成
「グローバルな視座」の育成
「科学的・論理的思考力」の育成

Ⅲ. 附属中学校カリキュラムポリシー

1. 自主自律の精神を持ち、広い視野に立って判断・行動し、習得した知識・技能を活用しながら社会の中で他者と協働し、自分らしく生きる生徒を育成する。
2. カリキュラム研究、帰国生徒教育研究、新しい教育課題に対する実践的な研究の成果を生かし、探究する楽しさを見出し、変動する社会の中で主体的に生きる力を育成する教育課程を編成する。

Ⅳ. 附属中学校の学校経営方針

1. 中長期の展望に立った学校運営の方向性

(1) 使命(ミッション) * 自主の心、自律と自治の力を備えた生徒を育てていくこと

- ① 前期中等普通教育を行い、生徒の自己実現を図り、適切な進路を選択し進めるようにする。
- ② 国立大学の教育研究機関としての附属学校の役割を果たして、学部・研究科等と連携し、実践的な実習・研修の場を提供するとともに、先導的な教育モデルや教材等を開発し、その成果を展開することで学校教育の水準の向上をめざす。
- ③ 大学との連携のもと、教育実習生やインターンシップの受け入れや、教員FD(Faculty Development: 大学教員団の資質開発)を行うなど、附属学校としての十分な機能を果たす。
- ④ 共同研究の場を提供し、研究の成果を広く内外に公開・発信して社会貢献を果たす。

(2) 展望(ビジョン)

- ① 教育目標の実現を図り、「多様なステージで活躍できる行動力のある人間」「多様な人々と問題意識や課題を共有できる懐の深い人間」を育成する。
- ② 「オールお茶の水」体制のもと、大学の研究所等と連携しながら、社会を革新する人間の育成をめざした先進的、先導的な教育モデルや教材・指導法の開発研究を行い、公教育への提案と還元を行う。
- ③ 大学の教育実習やインターンシップ、教科教育法の授業等を積極的に担当し、これからの教育を担う意欲的で実践力のある高度な教育力をもった教員の養成に協力する。
- ④ 国内外の教員交流及び学校視察や参観等を積極的に受け入れると共に、研修講師派遣や研究協議会等の公開を通して、教師の研究力・指導力の向上や学校教育の高度化に寄与し、社会貢献に努める。

(3) 目標(ゴール)

- ① 教育課程:
 - ・教育目標の実現をめざした授業や教育活動を立案・実施し、すべての生徒の個別で多様な学びを促すとともに、自主自律の精神を涵養し自治能力を育成する。
 - ・生徒一人一台端末をはじめとするICT環境を生かして、学ぶ意欲を高め、学習成果を高める指導法や評価法を工夫し、生徒の主体的な学びを一層支えていく。
 - ・本校のこれまでの研究実績を土台にして、これからの社会を革新する教育内容・方法の提言につながる研究を創出すべく、開発研究の指定を目指す。
- ② 学校運営:
 - ・人的組織、経費運営、施設・設備等を適切に整備し、附属学校本部会議、附属学校委員会、教育研究推進専門委員会との連携のもと、柔軟で機動性に富んだ学校環境を構築する。
 - ・生徒にとって安全・安心な教育環境を整備するとともに、開かれた学校に向けての取り組みを推進する。
 - ・ICT環境を活かして校務全般を見直し、効率よい学校運営体制を作っていく。
- ③ 大学との連携:
 - ・大学との連携を密にし、大学の支援や助言を得ながら、中学校の教育および研究の成果を高めていく。
 - ・附属学校として、コンピテンシー育成開発研究所・理系女性育成啓発研究所・SDGs推進研究所等と連携した種々の教育研究活動に積極的に寄与しながら、本校の教育研究・実践を一層充実させる。
- ④ 社会貢献:
 - ・視察や参観・研修の受け入れ、公開研究協議会の開催や研究紀要等を通じて研究成果を公開、発信する。

2. 2025年度の経営計画

(1) 学校経営における2025年度の重点課題

【前提】本校の様々な強みを生かし、またこれまでの教育研究の蓄積を踏まえて、日本の教育に提言を行える新しい学校像を、生徒たちとともに作っていく。

本校の強み ・多種多様な力や可能性をもった個性的な生徒たち

- ・きめ細やかで、一人ひとりを大切にする学習・生活指導に優れた魅力的な教師集団
- ・大学や他の附属校園との連携、外部の専門機関とのつながり
- ・保護者、同窓会や教育後援会等の人的、財政的支援

①教育課程(個に応じ多様性に学び合う教育課程) ◎は新たな重点、○は継続的な重点

○生徒たちの「個に応じた学びの場、協働的な学びの場」をつくり、生徒の「創造性を育む教育」(つくる学びを創る)の内容・指導方法等を研究・開発する。 →ICTの効果的な活用、R6に取り組んだ創造性教育の継続

○帰国生の学びの姿をつぶさにとらえて日々の帰国生教育を見直し、本校の取り組みを公開・発信する。

→ R6年の検討を踏まえ、帰国生入試のさらなる改善を目指す。帰国生学級の手引きの改訂。

◎研究開発学校指定研究「生徒の深い理解を促し教科を超えた学習語彙の活用を支援する新教科「知の架け橋」を設置し、日常的に学習語彙に触れ、探究的な学びにおける言語活動の指導を通じて、各教科・領域の学びが互いに関連し合い、相乗効果を生み出す教育課程の開発」(開発課題より)の研究基盤を形成する。

①学習語彙の体系的収集・整理と、共有

②教科横断の学習語彙の活用を支援する教育課程の編成(新設教科「知の架け橋」)

【2025年度の主な取り組み】

各教科にまたがる学習語彙の収集、整理と指導方法の仮説を設定する。

生徒が学習語彙を活用しながら思考力・表現力を高める基盤を作る。

総合的な学習の時間と自主研究の中で学習語彙の活用状況を測定し、それを促進する。

各教科で学習言語を意識した言語活動を実施し、表現力と論理的思考力の向上を図る。

②学校運営(生徒も教師も充実感・効力感をもてる学校づくりの[3つ]の視点)

[互いを認め合い安全・安心で心地よい学校の基盤づくり]……生徒指導・教育相談・人権教育

○生徒一人ひとりに寄り添った生活指導、進路指導を行い、生徒たちが安心して学べる学校、将来への基盤となる学校の実現を目指す。

→ 「働き方改革」と「魅力ある学校づくり」の二つの視点からの学校改革への取り組みを進める。

→ 「いじめ防止対策基本方針」「同マニュアル」に沿って指導と対応を行い、安心安全に学べる学校をつくる。

○災害安全・生活安全・交通安全の三つの視点から訓練を行い、学校内外の安全な環境を構築する。

[働き方改革に立つ学校づくり]

○校務を様々な観点で見直して精選・効率化を進め、教師がゆとりと充実感を持てる学校をめざす

・学校改革委員会の新設により改革へのアイデアや課題を整理し中期的な展望をもった改革を進める。

・校務分掌組織(各部・教科・学年)をそれぞれ核にして日常的な校務の削減を図るとともに、相互に提案し合って改善・改革の基盤を形成する。

→ R6働き方WGの成果と提案、R6企画委員会での提案等をふまえ、これらの実現を目指す。

→ 重点化・焦点化、発想の柔軟化・弾力化

→ 外部人材の活用、生徒や保護者に任せていく部分を広げていく。

○部活動の見直し(関連外部団体と連携して受益者負担を含めた抜本的な構造改革を行う)

→ 中期的な改革の完成に向け、2025年9月以降を目指して段階的な実現を進める。

[学校づくりの基盤づくり]

○教育の三つの柱(科学的・論理的な思考、グローバルな視座、温かく深い人間力)の実現を図る。

→ 「温かく深い人間力」の育成の重点化=いじめの無い学校を目指したさまざまな取り組みを進める。

○生徒の声に耳を傾けるとともに、保護者との連携・細かくも丁寧な情報共有のいっそうの充実を目指す。

○魅力あるお茶中の発信・生徒獲得のための広報活動・入試改革を進める。

→ 提携校の継続決定(R15年まで)をふまえ、内外への進路情報の発信を工夫していく。

○エアコン等設備改善を進め、施設面および防災備品等の整備計画を立てていく。

○教員研修の充実と改善を図り、教員個々の教育実践・開発への意欲を高め教育力の向上を図る。

→ 他校研修を始めとした研修機会の有効化。

→ 校内研修の効果的な見直し(いじめ対応・生徒理解:ケース研究等、働き方改革:話し合い等)

○校費・寄付金・預かり金を効果的に運用していく。

○先生方の声を聞く副校長面談等を設定し、所属感と効力感のある働き甲斐のある学校を作っていく。

③大学との連携

- 附属学校課・附属学校園と協調しながら、大学の諸機関(コンピテンシー育成開発研究所、理系女性育成啓発研究所、SDGs推進研究所等)と連携しながら、円滑な情報共有を図る。
- 教科教育法等の授業、教育実習等における学校DX対応を進めつつ、インターンシップ[※]、キャリア副専攻等では大学との連携を図りながら、各教員の教育力を高める。

④社会貢献

- 特色ある授業開発・研究を行い、その成果を公開研究会、教材・論文データベース等において広く公開する。
- 帰国生徒教育の研究的実践を継続的に進め、その成果を学校関係者、生徒や保護者等に還元する。
- 学校視察や参観、研修員の受け入れ手順を引き続き整備して可能な限り実施するとともに、公開研究協議会の開催や研究紀要等を通じて研究成果を積極的に公開、発信する。

(2)各校務分掌の重点目標

①経営企画部 会計も自主・自律 環境を整え、広い視野を

- 会計処理期限のリマインド、「会計ポータル」をより充実させるなど、迅速な会計処理を促す。
- 管理する施設・設備、備品・消耗品について、事前の対策(点検、在庫管理)・事後の対応(営繕依頼、廃棄)で、いつでも使えるようにする。
- 職員室の整備、美化をすすめ、快適に働くことができる環境を整える。

②教務部

- スマートな教育課程
本校の教育課程が円滑に実行されるように支援をする。学習指導要領に対応した校内体制をつくる。キャリア教育・進路指導は進路指導委員会と、道德教育は研究推進委員会と連携して取り組む。
- シンプルな校務執行
校務の効率化・機能化を図り、校務の適正な分担と負担均一化を基本とする。働き方改革とも連動し、誰にでも分かりやすくシンプルで継続可能(sustainable)なシステムを考え、良いアイデアは積極的に活用する。教員が生徒と共にいる時間を減らすことのないように無駄な事務作業を削減する。事務作業の外注化も目指す。
- 役立つ情報の提供
各種校務のマニュアルなどを整備し、必要なときに必要な情報が入手しやすくなるようにする。

【2025年度の重点】

1. 校務システムBLENDの日々の運用を検討していく[出欠管理・成績処理 等]
広報情報部など他分掌と連携しながら、成績や出欠席などについて共有しやすい方法を検討する。
2. 帰国検定のあり方について、研究部と協力しながら検討し、全教員との共有を行いながら運営する。
3. 「見える」入学検定に
・miraicompass導入や検定資料のダウンロード化によって、担当者でないと「見えにくい」ものになってしまっている検定業務を、先生方から「見える」形にしていく。

③研究・帰国部

- 1) 研究推進委員会と連携し、研究開発1年次として情報の共有、研究の一部実施に向けて準備を行う
- 2) 自主研究ガイドの充実と指導法の共有
探究的な学習活動における言語活動の充実のカリキュラムの作成
- 3) 帰国生・グローバル教育研究の実践成果の共有化(ポータルサイト、共有ドライブの活用)と充実
- 4) 学ぶ環境づくり
- 5) 大学、附属、外部研究機関との積極的な連携、外部視察の受け入れや交流

④生徒指導部

【2025年度の重点目標】

- (1) 落ち着いた学習環境を整え、個に寄り添った指導の充実を目指す。
- (2) 生徒主体の教育活動を展開しながら、活動内容の精選と再配置を進める。
- (3) 本校の部活動のあり方を検討し、指導方法や組織の見直しを継続する。
- (4) 安心・安全な学校づくりにむけて学校の危機管理対応について関係機関と連携をとりながら見直しを進める。
- (5) 情報社会で適正な活動を行うためのものとなる考え方や態度を育む指導の充実と整備を進める。
- (6) 生徒一人一人の尊厳と人権が尊重される学校づくりを推進する。

【2025年度最重点項目】

- (A) 3年間の部活動地域移行期間の最終年度として、移行計画に基づき、可能な範囲から実現化を進める。
- (B) いじめを排し、他者を尊重する集団作り(SNSTラブルを含む)に向けた取り組み(講演・道德の授業など)を進める。

⑤広報情報部

「進取・迅速・創造」

【安全で安定した環境構築】(情報)

安全かつ安定したICT環境を維持し、Google Workspace for Education Plusを活用することでより高度なセキュリティの確保、ライフラインとしてのICT環境構築を目指す。

【人員・時間・コストのバランス維持】(情報)

お茶中のニーズを的確に把握し、人員・時間の制約下で、コストを抑えつつ最適なICT環境整備を目指す。

【複数のツールによる持続可能な発信】(広報)

複数のツールを活用した質の高い広報活動を展開し、教職員の負担を考慮した持続可能な広報を推進する。

【生徒と共にDX よりよい学校づくり】(情報 広報)

迅速な情報共有と円滑なコミュニケーションをDXにより実現し、組織の活性化を図る。また、情報モラル育成のための指導体制を確立し、他分掌やDXアドバイザーと連携しながら、働き方の改善を念頭においたよりよい学校づくりを目指す。

(3)各学年の教育目標

1年 学年目標:「紡(つむぎ)」

■重点目標:「よりあう」～仲間との紡ぎ合いを楽しむ～

- ①自分の興味・関心に気づき、主体的に物事に挑戦する。
- ②自分を開き、互いに個性を認め合いながら新たなつながりをつくる。
- ③様々な人や物事と出会う中で多様性を理解し、つながりを広げる素地を培う。

2年 学年目標:「奏(かなでる)」

■重点目標:かなでる[協奏]:人や物事との関わりを深め、互いに響き合う

- ①「磨く」多様な見方・考え方に触れて視野を広げるとともに、自己の判断基準を磨く。
- ②「協働する」個人だけではなく、集団としてより良い方向に向かうために互いに働きかける。
- ③「関わる」社会の物事への興味・関心を広げながら、自分や仲間のこだわりを見つめ、選び、できることから関わる。

3年 学年目標:「輝(ひかる)」～互いの良さを照らし、自分を磨き、輝く未来を切り拓く～

■重点目標:「輝く」～社会とつながり、未来を切り拓く人に～

- ①自分の生き方や変化する社会を展望し、自分らしい進路を切り拓く。
- ②多様な文化や価値観を尊重し咀嚼しながら、寛容な態度のもと、ヒト・モノ・コトの善さを見出していく。
- ③社会の課題に自分事として向き合い、自身の個性・良さ・魅力を生かしながら、学び続ける主体として新たな価値を創出・発信し、社会に参画する。